

## ムヌ（幽霊）の話（3）

川 内 且 昭

### （十） （五）

宇根カナさんの話

昔は、たびたび、天然痘が流行し、そのたびごとに、数多くの人々が死んで行った。死んだ人達の中で、島外から来ていて身寄りのない者は、こもに包まれて、メーグチバンタ（前口坂）の下の岩穴に捨てられるのが、慣わしであった。岩穴の中に積み重ねられた死体は時がたつにつれて、悪臭を放つようになった。死体から流れ出る液体で、こもは湿っていた。こっそり足音をしのばせてそのそばを通ると、このとおりであったが、人声がしたり、足音が聞こえたりすると、悪臭はなくなり、こもは、からからに乾いてしまったという。人声や足音を聞いた死人の魂は、醜くなった自分の体が人に知られるのを嫌い、こうしたのだと考えられている。

### （十） （六）

同じく宇根さんの話

棺に入れられて、墓に葬られた死体は、一週間目に、眼球が抜け落ちると言われ、そのときにはドーンと大きな音がするという。

また、爪が抜けるときには、とても痛むので、すでにあの世に行っている身内の者たちが寄り集まって、その人を慰めいたわるという。

「アキタナマジミヤ、ヤディドウ アカリユル・・・」とかいう歌があり、これは、そのときのことを歌ったものだそうである。

「アキタ」とは、《あいた！と悲鳴をあげること》、「ナマジミ」は《生爪》、「ヤディドウ」は《痛んでこそ》、「アカリユル」は《爪がはがれること》。

### （十） （七）

## 父 の 話

朝戸部落の中央、ヌジャミという所に、ユシガマという、容貌の美しい、娘が住んでいた。ユシガマは、ある男と深い恋仲にあった。しかし、ユシガマは、病いを得て、死んでしまった。彼女の葬られた墓はシミャーにあった。シミャーは、島の南端の高い断崖の上であり、風光明媚なところであつた。男はユシガマのことが忘れられず、ユシガマが葬られたその晩から、いろいろな御馳走を入れた重箱と、焼酎を入れた銚子を持って、シミャーを訪れた。墓の東側の草の原で三味線を奏ではじめると、ユシガマは、墓の方から手踊りをしながらやって来て、男と向きあって座った。それから、二人で、馳走を開き、食べつつ飲みつつ、一番鶏が鳴くまで、歌ったり、語ったりしたという。ユシガマが去ったあと、男が見ると、彼女が食べたはずのものは、そのまま、もとの形で、草の上にあったという。

それでも男は毎日通い続けた。そして、七日目の晩、草原に近づくと、アラシナ《珊瑚礁の破片から成る荒い砂》を投げつけられて、どうしても踏み入ることが出来なかった。

七日目には、死人は腐りかけて、顔の形がくずれると言われており、ユシガマは、自分の醜い顔を男に見られるのを嫌って、男を寄せつけなかったのだと考えられている。

チキヌン ティ コイ ハギヌン ティ ユイ サンカミジラシャ ワスリグルシャ。

これは、そのとき、ユシガマが作った歌と言われており、現在も度々歌われる。

この世にも、あの世にも照るこの月の下で、あなたと楽しく遊んだり、歌ったりした事がどうしても忘れられないのです。と意識される。

## (十八)

### 同じく父の話

首を吊って死んだ人は、あの世に行く事ができないので、その付近を、首に紐をかけたまま歩きまわり、しばしば人目に触れるという。

## (十九)

### 父 の 話

朝戸部落、ニツチェー組の池田某が、三十年程前、村役場に勤めていた時の事である。夜中を過ぎて、泉某と共に、帰途についた。

ピヤースパンタ《ピヤー坂》の近くで、江戸末期か明治の初めのころに、首を吊って、死

んだ老人があった。二人が、ちょうど、この坂の中程まで来た時、泉某は、後から、誰とも知れぬ人影が、近づいて来るのに気づいたが、池田某は、それに気づかなかつた。坂の上で、二人は別れるのが普通であつたが、泉某は怖くなって、人家の多い所まで一緒に行つて、そこで別れた。池田某は何の不思議も感じないで、家に帰り、ズボンは、横に渡してある竹に下げて寝た。翌朝、先に目を覚ました妻は、ズボンに血が沢山ついているのを見て、大変驚き、そのわけを夫に尋ねたが、夫は知らなかった。後で、泉某が、坂であつた事を話したので、三人共、納得できたという。

首を吊つて死んだ人が、池田某に血を吹きかけたのだと考えられている。二人以上居るとき、害を受けるべき人は、ムヌをムヌであると気づかないのが普通である。この場合泉某は、後からついて来る者を怪しいと気づいたのであるが、池田某は、全く気づかなかつたのである。

